日弁聖人伝

――日弁の俗姓論――

鈴木隨順

目次

一、序
二、神四郎長子説
三、日弁と日忍との関係
四、高橋入道及び日頂との関係
五、洛陽生誕説
六、真実と仮説

一、序

日弁は越後房、中老越後阿闍梨ともいわれ、昔より駿河国が生国と伝えられている。幼い頃天台宗の沙門となり、学成りて富士郡滝泉寺の住房に居住していたことは、滝泉寺申状や峰の古文書等で知ることができる。

日弁聖人伝

聖祖身延入山の直後、日興に従って改衣したもののようで、後建治年間身延山中に聖祖を訪い直弟となると伝えられている。

聖祖在世中における門下最大の法難は、熱原法難事件で、同法難で主動的役割を演じ、法難以後一時下総に退避したが、まもなく駿河の生国に帰りこの地を根拠地として、聖祖に給仕しながら布教活動に従事していたことは、聖祖より門下への御書、日弁の供養品等のことで想像せられるところである。

聖祖滅後守塔輪番の班に列したが、地理的好条件もあり、また日弁外護の信者も相当あったものと考えられ、祖廟奉仕は確実に実施されたものであろう。

聖人滅後の門下の動向に対しては、一つの見識を有し亦日昭に次いでの年配者でもあるところから、具体的な行動にでず只管祖廟へ奉仕しながら、布教弘通に従事していたもののようである。その誠実な行動と洞察力によって日興身延離山の際もこれに同ぜず、日持が海外布教出立の前後、同じように折伏弘通の途に上り、応長元年謗徒の毒手に斃れた、時に七十三才であったと伝えられている。

古来各門流の先賢によって、日弁の事績は種々に語り伝えられていて、その史料は乏しくない。然し信憑に価するものが比較的に少ない、最も交通不便な時代のことでもあり実像が見失われ、虚像が画き出されたのも止むを得なかったであろう。虚像はそれなりに意味があり、否寧ろ虚像の中に実像の片鱗を窺い知ることもできよう、ここに問題の所在を発見するのである。

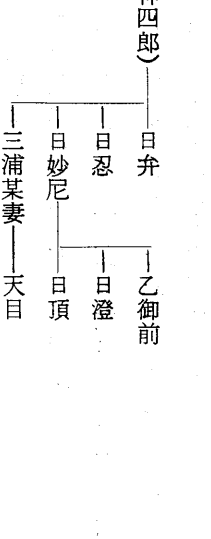
かかる立場から従来伝えられている日弁の所説を照会しながら、日弁に関する諸伝記を世に問い感情や偏見によって歪曲された日弁伝を取捨し、修正し、合わせて日弁の業績を明確にしようと意図したのであるが、もとより浅学非才の凡僧のなせるわざ、諸賢聖の教示叱正を乞う次第である。

二、神四郎長子説

中老日弁は、延応元年（一二三九）駿州富士郡楠村、熱原神四郎の長子に生れ、応長元年（一三一一）奥州伊具郡佐久良（村制の頃桜といい、昭和二十九年に現地名である角田市佐倉となる）にて浄念寺の寺男久六に刺され殉教死したと伝えられているが、生家については異説もあり明らかでない。

別頭統紀によれば「駿州富士郡之人父性者源氏熱原甚四郎国重長男也」[1]と述べ、年譜攷異[2]、御書略註[3]、日蓮宗史要[4]等先哲の人々は統紀と同じく神四郎の子として伝えている。

日弁の伝道根拠地であり、比較的史料も整い研究もしていると思われる、鷲栖の鷲山寺（茂原市）にも明確な史料がない。わずか同山の執事長職であった日吉師の「日弁上人史」という小冊子があるが、別頭統紀を始め御書略註等の文から引用したものであろう、今その系図を左に示せば、次の如くである。



これに対し鷲山寺の筆頭末寺である上行寺に異説が伝えられている。

延応元年己亥小田原千代と云処御誕生御父桜町中納言重教公御母阿波内侍初者真言宗駿州久須根村竜泉寺貫主幽弁上人と号蓮祖教化名越後坊[5]

日弁聖人伝

日吉師が同じ門末の上行寺古文書に一言もふれず、別頭統紀等を踏襲したのは如何なる理由によるか、上行寺文書が史実として信憑性に欠けるからであろうか、統紀によれば、小田原千代の蓮華寺は中老下野日忍の創することを述べている。[6] ところが蓮華寺は中老下野日忍の創立ではなく、日弁の弟子日忍の創立であることは、三項の日弁と日忍との関係を参照すれば明らかであろう。

次に当家諸門流継図によれば、熱原法難事件前、法華読誦を行智によって停止された日弁は所縁を憑んで四年間寺中にかくれていたが、それもならず関を下って大友という所に至り天台宗蓮華院を教化して弟子となし、日鏡の名を与え蓮華院を蓮華寺と改め後大友の地を捨てて千代に移したのであるといい、[7] 日弁の布教活動のように伝えているが、恐らく日弁の弟子日忍の伝道教化によるものである。

尚蓮華寺の寺伝によれば文永十一年の創立で開基日弁、一世日鏡、三世日忍となっているが、文永十一年の聖祖身延入山の年で、日弁の改衣推定頃の年代でもあり、文永十一年の創立は信用できない。

扨て鷲栖筆頭寺院上行寺文書は日弁の生誕地を誤るばかりでなく、弟子日忍の弘教活動と混同し創作したものであることは推量できる。即ち日弁が滝泉寺の貫主で幽弁上人と号していたという文面にまで及んでいるのである。後世更に附加されることを怖れ、日吉師がこの史料を除外したのであろうか、然しどのような記録や伝承にしろ、次の世代に亦語り伝えられていかねばならない。何故なら伝承の中に盛られた種々相に、新たな仮説が生ずる可能性が含まれているからである。上行寺文書の中納言重教が日弁の父であるという説もあながち否定されない、全く根拠のないことでもない。このことは後にふれることにして、日弁が神四郎の子であるとする前掲の事柄について論を進めてみよう。

結論から言えば、神四郎は日弁の弟子であって父ではないと断定したい、この方がまだ妥当性がある。即ち熱原法

難二十年後、往時を回想した日興の本尊分与帳に次のように記されている。

一、富士下方熱原郷住人神四郎兄

一、富士下方同　郷住人弥五郎弟

一、富士下方熱原郷住人弥次郎

此　三人者越後房下野房　弟子廿人内也弘安元年奉信始処依含兄弥藤次入道訴被召上鎌倉

右によれば神四郎は日弁の弟子であり、五人兄弟説により、弥藤次、神四郎、弥五郎の三人兄弟で、弥次郎は関係がないようである。尤も神四郎は日弁の弟子あり、父でもあると考えられないこともない。然し熱原法難は弘安二年に起っているので日弁は四十一才、日弁の父とすれば神四郎は六十才前後の老令となる。現今の六十才は壮年のようであるが、昔の六十才は相当にふけていたと考えねばならない。然るに行智一派の手によって作毛を苅取ろうとした時それを阻止しようとして乱闘事件となり、平頼綱の子資宗の念仏強要にも動ぜず、唱題を貫き通した神四郎が、六十才を越えた人とは考えられない。

然も神四郎は「弘安元年奉信始」とあるから入信一年目のことである。そして争いの張本人として訴えられているのである。かかる点から神四郎は日弁の弟子で、父ではないと断定したいのである。

三、日弁と日忍との関係

中老下野阿闍梨日忍は熱原神四郎の子で、日弁の俗弟説を唱えているのは、日弁を神四郎の子とする文献であるので信頼できない。

統紀等の説によれば、相州相橋長福寺の開山下野阿闍梨日忍は、俗兄日弁の譲りをうけて峰の妙興寺二世となり、

応長元年四月十日示寂したと伝えているが、日弁の弟子妙興寺二世日忍の千田の庄への居住は、前説の日忍滅後三十年の暦応三年（一三四〇）頃である。このことは年代作者共に明かでないが、恐らく慶長八年（一六〇三）以前のものと推定されている当家諸門流継図に示されている。即ち

一、日忍下総居住之事……于時暦応四年辛巳十二月二十日於下総国千田庄内大島城為末代記之日忍御判、日憲私云……日忍は自鷲栖日弁授与之三枚続の御漫荼羅を持て下総へ御越と見たり、中山裕師在世最中也[9]

暦応三、四年頃下総に居住した日忍は、関東東海地方に遊化弘通し多くの寺院を創立し、恩師日弁を開祖とし、自らは二世又は三世となり、永和五年（一三七九）六月九日示寂している。永和五年寂の所伝は峰の古文書及び墓碑と諸門流継図である。

統紀によれば中老日忍の根拠地は相州相橋の長福寺で、今は厚木市愛甲の地名になっている。長福寺は関東大震災の時埋没し、以後無住寺に等しい状態が続けられ、日忍の墓所は丘の斜面下にあって、わびしく応長元年四月十日遷化の墓碑がこじんまりと建立されている。

日弁開山、日忍二世とする小田原市内の本光寺、蓮華寺、妙覚寺、雨坪の弘行寺等は中山門流で、愛甲長福寺而已が身延末である。従って長福寺日忍と峰の日忍とは別人でなければならない。

次に俗弟問題についても統紀・攷異より、継図の方が信憑度が高い、次にその文を抽出してみよう。

日弁の俗姓之事……駿河が御生国と見たり……去て日忍は日弁の直弟也……雨坪にて御誕生と古老申伝へたり、実不実不被知之。[10]

下総国峰妙興寺継図之事　応長元年辛亥六月二十六日逝去なれば、蓮祖の弘安五年壬午より三十年目の遷化也、

去て日忍は人王百代後円融院の永和五年巳未六月九日の遷化なれば、大聖人よりは九十八年後れ玉へり、此時不レ奉レ値二蓮祖一日忍也。[11]

右のように日弁の生国は駿河の国であろう、日弁の弟子日忍の生国は、南足柄町雨坪と古老からきいているが、実不実は知らないと述べ頗る客観性の度合いが強い。

次に聖祖入滅後九十八年も長寿した中老の直弟があろうはずがない。又日弁は七十三才の高令で殉教死したが、それから後六十九年も長寿した肉弟があるとは考えられないと論証しているのである。

下野公日忍は日弁の肉弟と考証した統紀はこの点不審に思いつつも、日弁の佐久良での殉教死を知らず、雨坪の弘行寺で遷化したと誤伝し、末だ世寿詳かにせずと所伝したのである。

継図に「聖祖に値い奉ざる日忍也」とあるから、既に四百年前に長福寺日忍と日弁の弟子日忍とが混同されていることが知られ、かくして後世一層混乱して伝承されたのである。以上のことから、日弁の直弟日忍の動向と教線の伸張は、中山門流の所伝で極めて明白に知ることができるが、長福寺日忍については、聖祖在世中の弟子なのか、又滅後の活動やその門流も全く知ることができない。故に下野公日忍とは日弁の弟子日忍のことであり、中老に数えられたのもその名が有名であったからである。若し中老の呼び名が、聖祖直弟のみに呼称せられるものであるとするならば、下野公日忍は中老と呼称する尊称は廃止されねばならない。

四、高橋入道及び日頂との関係

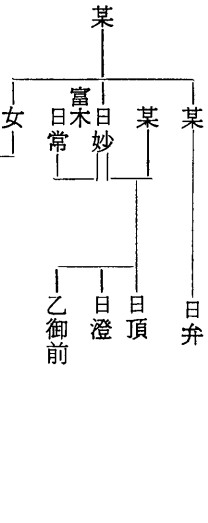
高橋入道夫妻は、聖祖より妙常妙諦の法号を授与され、その法号をとって聖祖六十才の賀寿を記念して、日弁が高橋入道の屋敷に蓮寿山常諦寺を創立したことを伝えているのが常諦寺縁起で、同寺の古文書に記録されていると現住

泉堯漸師の言明である。統紀もこのことを伝えているが、統紀を踏襲するときは、統紀曰、統紀詳伝と必ずことわけしている攷異は次のように述べている。

駿州本市場常諦寺山号蓮寿、旧記曰、弁公弘安四年二月創二蓮寿山常諦寺於駿州賀島一以賀二大士六十初度一。[12]

右のように「旧記曰」とあるのは、常諦寺の縁起をさしたものであろうか、とにかく統紀、攷異以外にも同様所伝があったことが知られる。

泉師は又日弁と高橋入道との関係として、他に類例のない系図を、推敲不足であるがと前言されたものを挙げてみよう。



前掲の日吉師の系図は日弁と日妙尼を兄妹とし、泉師は日妙と叔母、甥の関係との疑いをもっている。

いろいろな立場やある視角を想定し、問題の解明を計らねばならないのであるが、その典拠する背景を探りながら論を進めてみたい。日妙尼が文永九年（一二七〇）の春佐渡一の谷の聖居を訪ねた時、日妙尼に書き与えられた御書を先ず手がかりとしたい。

日本第一の法華経の行者の女人なり。故に名を一ツつけたてまつりて不軽菩薩の義になぞらへん日妙聖人等云々。

相州鎌倉より北国佐渡の国、其中間一千余里に及べり。山海はるかにへだて山は峨峨海は涛涛。風雨時にしたがふ事なし。山賊海賊充満せり。すくすく（宿々）とまりとまり（泊々）民の心虎のごとし犬のごとし。[13]

日妙尼はこのような自然環境や社会情勢の折、幼女乙御前を連れて鎌倉よりはるばる山河を越え、流人の聖祖を訪れたのである。その求道の強さ、信心の深さに驚嘆せられるが最も古い信徒の一人であれことが推察されよう、とすれば当然日妙の家族や親戚関係をも聖祖は知っていたものと思われる。然るに熱原法難以後、聖祖が中山富木常忍に日弁の庇護を依頼したといわれている富木殿女房尼御前御書によれば、日弁と日妙尼とは全く知見のないように書かれている。故に日弁と日妙尼との兄妹説は否定されてよいのではないか、同時に泉師の叔母、甥の関係も日頂のことも同様である。然しこのことは日妙聖人と法号を賜った婦人と富木尼が同一人と見ての上のことである。

富木尼と乙御前の母日妙聖人に就いて、攷異は次のように述べ別人としている。

賜二日妙一二書（日妙聖人御書、乙御前御書）共言二其子事一而無レ及二富木事一又閲下弘安二年賜二富木室一二書上此非二日妙一矣。[14]

日妙尼への賜書はこの他年代不明の身延からの一書（明治三十五年判明）乙御前母御書があり、攷異の著者建立日諦がこれを知って居れば、日妙に賜う三書とし「無レ及二富木事一」と云いきったことであろう。

今同一人として次の点にふれてみよう、建治元年八月の乙御前御消息によれば「いかなる男をせさせ（為夫）給フとも法華経のかたきならば随ひ給フべからず」[15]とあるからこの時は未だ寡婦であるが、翌月の「御衣並単衣御書」、半年後の「富木尼御前御書」を見ると既に再嫁していることになる。この半年間に於ける二御書の文中に人情豊かな聖祖の二人の良縁を喜ぶ言葉の見えないのは何故であろうか、かかることから別人とする方が妥当性がある。富木尼と日妙尼が同一人、別人であろうが日弁と親族でなかったことだけは確かなことであろう。ただし高橋入道との有無

については問題がある。何故なら建治元年七月、入道病臥の折聖祖より慰めと激励の御書が送られたのであるがその追白に「覚乗房、はわき房に、度々よませてきこしめせきこしめせ」[16]とあり、日興はこのことでしばしば高橋家に立寄り、聞法せしめたことは推量されるのである。この数度の往来中入道夫妻となんらかの交情のあった日弁と日興との出合いが想像せられないか、然も日弁は日興によって改衣しているのである。後宗祖に直参した年代が、同入道御書と同じ建治元年であり、その上高橋入道夫妻の法号を寺名にし、日弁が開山となっている因縁を見のがすことはできない。

尚日吉師の日弁上人史は、弘安四年父の神四郎及び兄弟の霊を弔うために、加島に常諦寺建立と伝えているのは、次の史料に基づく創作であろうことを付言しておきたい。

国重　賀島ノ人仕ニ高橋一ニ弁忍二公之父富士郡信者之魁　弘安中為レ法ノ下レ獄ニ被レ斬戒号妙諦妻ノ号ニ妙常一[17]

五、洛陽生誕説

日弁は少納言信成の孫に当たり、幼名を寅磨と称したというのであるが[18]、家門を飾り系図の尊さを誇る日本人の習性であるとして、一概に無視も出来ない面があるばかりでなくいろんな要素が含まれているのである。先ず峰の古文書を挙げてみよう。

当時由緒

下之総州香取郡中村正峰山妙興寺者高祖大士之門人日弁聖人開基之道場也……弁師洛陽之産未詳氏姓旧記日四条院朝少納言某嫡孫也……旧記亦今亡矣　是ノ故未レ詳ニ当寺ノ来歴一、但任ニ反故所録一或依ニ村老ノ口碑一聊記ニ梗概一而已

元禄八年乙亥六月　日

応ニ千水戸黄門光国公索一卒爾書レ之

日是判

芳翰辱弥御堅固之旨大慶此事に候……一其寺縁起一段殊勝存候、此元に御座候弁師之次第と少も相違無レ之候故、早速昨晩御近習三木幾右衛門殿迄頼上候……[19]

日耀判

六月十三日

日是師御報

神四郎を父とする統紀は一七三一年に脱稿しているが、これはそれより三十六年前の一六九五年の記録であるだけに注目しなければならない。

水戸檀林は三昧堂檀林といい、元禄六年豪華な新檀林が落成し、この年の秋勝光日耀が講主として招かれてから、全国の学僧、高僧の出入が一層激しくなるのであるが、隠居した光国も元禄八年一月には、中山、中村、飯高へ参詣しているばかりでなく、[20]光国は主なる門下寺院の縁起調査を命じていたらしい。

即ち

一中山上人より飛脚来る。日厳よりの書並浄光院日逮より状こせし正中山記あらまし書付てこし給ひぬ。[21]

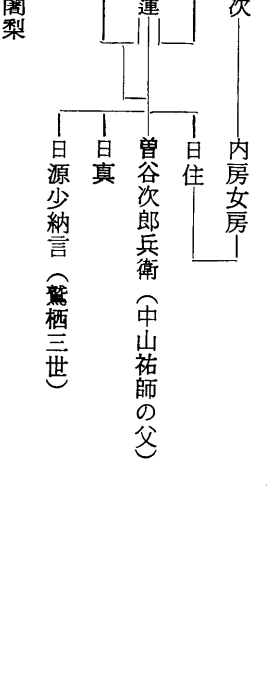
中山の縁起は三月二十四日に、峰の縁起は同年六月上旬にそれぞれ届けられている。右に掲げた当寺由緒は光国から峰妙興寺の当住日是に対して峰の縁起が尋ねられたのについて、中山の輪番四十世、京都妙顕寺二十世を勤めた当時水戸檀林の講主をしていた勝光日耀を通じて提出したものである。これに対して「此元に御座候弁師之次第と少も相違無之候故」と日耀より日是に仮信していることにより、洛陽の出身、少納言某嫡孫説は他にも伝えられていたことを証明している。

又鷲山寺の筆頭末寺である上行寺に重視すべき異説が伝えられていることは一項でふれたことであるが、日吉師の「日弁上人史」によれば、日弁が京都に出張し、中納言重教を教化したと述べ、その子が入弟して少納言日源と名乗したという、同じ鷲栖門流の近末寺院住職が、一方は桜町中納言を父とし、一方では信徒であると所伝している。尚前掲の如く小田原千代にて出生としているのは、上行寺文書而已のようである。

日吉師の説によれば、日弁は上洛し布教活動を行ったようであるが、如何なる文献によるのか不明である。日親の伝燈鈔によれば「日弁は上総鷲栖開山也、京都青柳厨子者鷲栖門徒也」[22]と述べ、真如日住の説では、日像のあとにつづいて京都に入ったのは天目門徒で青柳のつじに一寺を開らいて本門寺といったといっているが、[23]日弁の弟子日寿の創立した現亀岡市の本門寺がそれである。他にもまた鷲栖門徒の入洛説もあるが、日弁が帝都布教に入洛したのでなく、日親の語る鷲栖門徒亦は日寿とする方が妥当である。

以上のことから中納言重教を教化し、その子少納言日源入弟説は否定されるべきである。

御書略註によれば、日源少納言は曽谷法蓮の子息で、鷲栖三世であると伝えているが、その血縁関係を図に示してみれば次のようである。



（宗全史伝旧記部一P三〇六～一二）

右の系図から推測すれば日源は内房の出身であるから、熱原法難後下総に退避した日弁が再びこの周辺に帰えり、布教活動を行った折日源が入門したものであろうか、亦日源が桜町中納言の猶子となった後も内房に居住していたものだろうか、角度をかえて更に論じてみよう。

六、真実と仮説

身延に退隠した聖祖は、仮りずまいの庵室にて日々静かな誦経三昧の生活に入ろうとされたのであるが、草庵への出入は年と共に多くなり、日によって四十人、六十人と訪問滞在者のあったことは弘安元年の「兵衛志殿御返事」に見える。それから九ケ月後の「曽谷殿御返事」によれば一百余人も学生たちに増加し、ついに弘安四年の十一月には子弟育成の道場が建築されたのである。

いよいよ人の出入増を予想された日弁は、内房女房に食器類の寄進を申し出たのであろう、女房は欣んでこれに応じたので、この旨聖祖に報告しその返事と思われる御書を左記に掲示してみよう。

内記左近入道殿御返事

追申。御器の事は越後公御房申候べし。御心ざしのふかき由、内房へ申せ給候。春の始の御悦、自他申籠候了。抑去年の来臨は曇華の如し。将又夢歟。疑いまだ晴ず候処に、今年の始深山の栖雪中の室え、経二於多国一御使、山路ふみわけられて候にこそ、去年の事はまことなりけるや〳〵とおどろき覚へ候へ。他行之子細、越後公御房の御ふみに申候歟。恐々謹言

正月十四日

日弁聖人伝

内記左近入道殿　御返事　（定本遺文　P一九〇七）　日蓮花押

右の内房とは富士川西岸の地名、内房に住んでいる人を尊称して呼んだものとすれば、内房女房のことであろうか、また内記とは辞典で見ると、中務省に属し詔勅、宣命の起草、叙位の辞令記録を司る職とある。故に相当文才のある者を選任したものであろう、「柳も去年の来臨は曇華の如し……越後公御房の御ふみに申候」との書信から内記左近は数年前に檀越となり、日弁とは深い交流と最も近い場所に居住していたことが想像される。尚御書略註の前系図によれば、日弁の弟子日源と内房女房とは義姉弟の関係となる。従って日弁と内記左近、内房女房、日源との深い交情が推量され、真実と伝説が入りみだれ、仮説が巧みに生かされた日弁俗姓の背景があるのではなかろうか。

内記左近が中務省の被官であったと仮定すれば、藤原信成の孫とする峰の古文書や桜町中納言の子とも所伝する上行寺文書が、あながち作りあげた虚講ばかりでもない。

峰妙興寺の当寺由緒に、「奥に檀越内記といふ者あり師を助けて上総国鷲巣に到る。一宇を建立して一乗の道場と為し、長国山鷲山寺是也」[24]とあり、この檀越内記が、御書の対告衆内記左近入道ではなかろうか、ところが鷲山寺の縁起によれば、当地の城主小早川内記左近将監がその屋敷を喜捨したことになっている。

昭和四十一年の茂原市史も、小早川内記がどの程度の豪族であったか、その人物も全く不明であるといい、子孫も九十九里町真亀に住んでいたと伝えられ、調査してみたが何も史料は得られなかったという。

当時の有力者は方々に土地があり、駿河居住の内記が茂原に領地をもっていたのではなかろうか、故に鷲山寺縁起よりも峰の由緒をとりたい。これは一五三五年より一九五四年の四百年間に四度火災に逢い史料も焼失した鷲山寺の縁起より、峰の古文書が価値が高いと思うからである。

次に鷲山寺二世日源少納言と義姉弟といわれる内房女房は、駿河国庵原郡内房の人で、父の百ヵ日忌に布施料十貫文奉ったことは、「内房女房御返事」に見える。

弘安年代の貨幣価値を量るものとして、貴重な史料は「上野殿御返事」であるという。それによれば「七月なんどはしほ（塩）一升をぜに百、しほ五合を麦一斗にかへ候」[25]とある。

七月にはとことわりがあるから、当時も物価の変動があった事が知られる。且つ共通の貨幣価値ではなく、山中山梨での銭一貫文で塩一斗の値段であったのである。

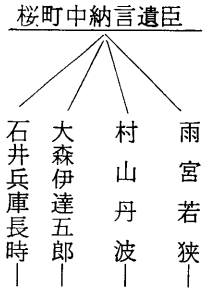
銭が一枚一文で、一文が単位となり千文を一貫とし、一貫文の値は金一両にあたっていたのは室町の末期からであるという、江戸時代になって一貫は一両の四分の一と計算されたのである。

以上のことから十貫文の布施を奉った内房女房は、相当身分があり豊かな生活者であったことが知られる。御遺文講義によれば「女房が願文に自ら『女弟子大中臣氏敬白』と署しているのに徴すると神祇に関係した人」[26]ではないかと述べているが、神祇関係の人とすれば女房と交親のあった内記左近は、武士でなく需者としてやはり中務省に属したことのある人のように考えられる。

日弁の俗姓は既に述べた如く神四郎の子、藤原信成の孫、洛陽の産、桜町中納言の子とする四説があるが、今尚鷲栖門流而己に口伝されている桜町中納言に関係せるものを付加してみよう。

日弁又は日弁の弟子蓮秀（日寿）の教化によって入信したものと思はれる桜町中納言の家臣四名が、弟子の日源、蓮秀、弁秀と一緒に日弁常奥弘通の際随伴したと伝えられ、その子孫が日弁の墓所である赤浜周辺に居住し、現今尚繁栄しているのは伝承を裏付けるものであるが、果して日弁が七名という集団で折伏伝道の途についたのであろうか、赤浜周辺に土着した四名の家臣とは次の人々である。

日弁聖人伝



右伝承の証となるものとして、改異の説を述べてみよう。

往二奥州伊具郡桜村一張二皇折伏之化一闡提輩悪而害之、年七十三、実応長元年六月二十六日也……従者且レ送二尺一於鷲巣一路宿二赤浜一及レ発膠二地不レ可レ転因葬二干此一㊲

殉教死せられた日弁の遺骸は、従者に担われて鷲巣へと向う途中赤浜に宿し、出発に際し柩は地に膠着した如く動かず。遂にこの地で荼毘にふし埋葬したことを伝えているのである。

攷異の著者建立日諦は常州沙門とあるから水戸の人であり、確かな史料に基づくものと思はれる。奥州に随行した人々は悲嘆追慕の情押さえ難く、この地に土着したというのは有り得ないことではない。

扨て日弁の直弟子日忍が鷲栖三世を継承しているが、鷲栖二世日源のもとから去るに当り内房女房や日源の甥である、中山祐師の下に参じ峰の妙興寺を創立し、以後各地域に寺院を建立し、すべて日弁を開山と仰いでいる。このような弘教活動から、これは聖祖在世中の亦は聖滅直後の活躍と見做され、中老に列したり、日弁の俗弟説が生じたのである。

以上のように日弁の俗姓は各説とも確かなものとなり得ない、虚飾により真実が歪められたのである。

日弁の素姓は百姓であろうが、貴族の出であろうが、人格価値がなんらかわるものでないのに、異説が多く伝えられているのは日弁及び鷲栖門流が勝れた業績を残した証左であろう。

付記

一谷入道御書の真蹟の中、七紙一軸が鷲山寺に在り、同御書の一紙が内房の本成寺に格護せられているのは深い縁由によるものか、

註

① 別頭統紀　P　二五五
② 年譜攷異　〃　一八〇
③ 宗全史伝旧記部一　〃　三〇五
④ 日蓮宗史要　〃　一三七
⑤ 大崎学報一二〇号　〃　九四
⑥ 別頭統紀　〃　二五二
⑦ 宗全史伝旧記部一　〃　一六二
⑧ 宗全興尊集　〃　一一六
⑨ 宗全史伝旧記部一　〃　一六三
⑩ 宗会史伝旧記部一　〃　一六一
⑪ 宗全史伝旧記部一　〃　一六二
⑫ 年譜攷異　〃　一八〇
⑬ 定本遺文　〃　六四七
⑭ 年譜攷異　〃　一〇七

日弁聖人伝

⑮ 定本遺文　〃一、一〇〇
⑯ 宿刷遺文　〃一、二八六
⑰ 年譜攷異　〃　一四八
⑱ 宗全史伝旧記部五　〃　一五〇
⑲ 宗全史伝旧記部五　〃一四七～八
⑳ 日乗上人日記　〃　三九六
㉑ 日乗上人日記　〃　四一一
㉒ 宗全史伝旧記部一　〃　六〇
㉓ 宗全史伝旧記部一　〃　九四
㉔ 宗全史伝旧記部五　〃　一四七
㉕ 定本遺文　〃一、五七二
㉖ 檀越篇三　〃　二七七
㉗ 年譜攷異　〃　一八一